朝鮮通信使史跡探索（十）

中川浩一

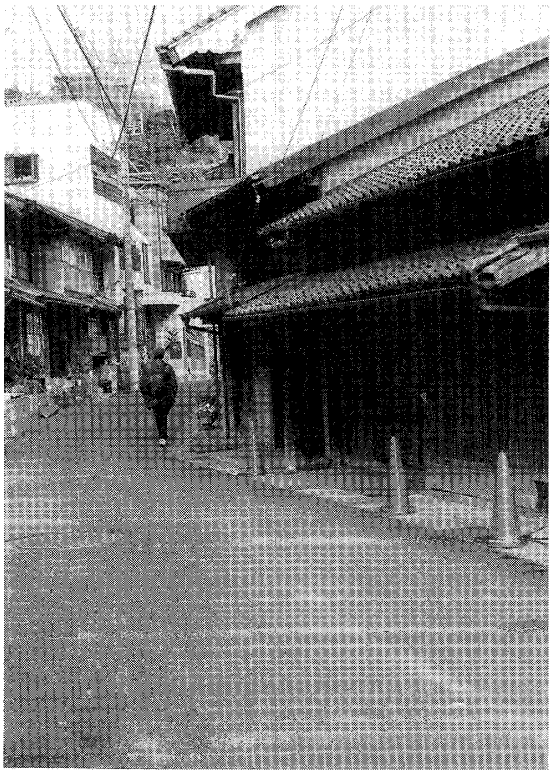
薩埵峠を江戸側に降りた位置に、間の宿を勤めた倉沢がある。箱根峠、大井川と並ぶ東海道の難所通過に備えて、西行する旅人への足がかりとして機能するのが、主な任務であった。安政の大地震に伴う海岸隆起に対応して下道が開かれると、倉沢の存在価値は大幅に減少するけれども、旅人の休息に資した施設の痕跡が、いくつかは残置している。

峠道をおりきった位置には、一里塚跡の標柱が建っている。ここから始まる家並みの中には、脇本陣を勤めた倉沢屋の建物を始め、〃大戸、くぐり戸、格子造りなど重厚な構え〃[注1]の故に、江戸時代の面影をしのばせる風情が残っている。

異形の額を持つ常圓寺

東海道で江戸から十六番目の宿場に相当する由比は、宿場の面影を観光の目玉に据え、由比本陣公園・東海道広重美術館などの施設を整えるが、朝鮮通信使とのかかわりは見あたらない。けれども東海道からはずれ、由比川をさかのぼった位置にある阿僧には、一六八二年（天和二年）の第七次通信使として来日した画員東巖（咸悌健）の書になる「法城山」の扁額を本堂の框にかかげる常圓寺が存在する。

朝鮮國東巖の署名を配した常圓寺の扁額が朝鮮通信使にゆかりの事物と気付いたのは、清水市駒越に位置する萬象寺の住職であった。[注2]



写真①　間の宿を勤めた倉沢を通る旧東海道の近況（1998年３月写）

位置は相互に隔っているけれども、二つの寺では、住職同志の交流があったからである。とはいえ、萬象寺本堂の扁額が、朝鮮通信使ゆかりの存在であることを「発見」し、住職に深い感銘を与えたのは、一九九四年に実施された県立清水南高等学校郷土研究部による調査の結果であった。[注3]

山形の板に「法城山」と大書した常圓寺の扁額は、形態的にも特異な存在であるのに加えて、裏面に漢詩が墨書されている。朝鮮通信使の構成員は、しばしば日本人と漢詩の交唱を行っており、常圓寺に残されているものも、そうした文化活動の結果であるのだろう。

扁額破損に伴う修理のおり、補強の板を打ちつけたのに加え、墨書が薄れて全文が読めなくなっているが、寶泰寺の末寺であった常圓寺の僧侶が、萬象寺の僧侶と府中（静岡）までむき、漢詩交唱を行い、その筆跡に似せて裏面に転写したものと思われる。

写真②　裏面に漢詩が墨書される常圓寺の扁額（1999年８月写）

中食や宿泊の拠点となった寺院に通信使構成員の書が残るのは例が多いけれども、直接のかかわりを持たなかった寺院が、集中的に清水とその付近で扁額を所蔵するのは、特異である。

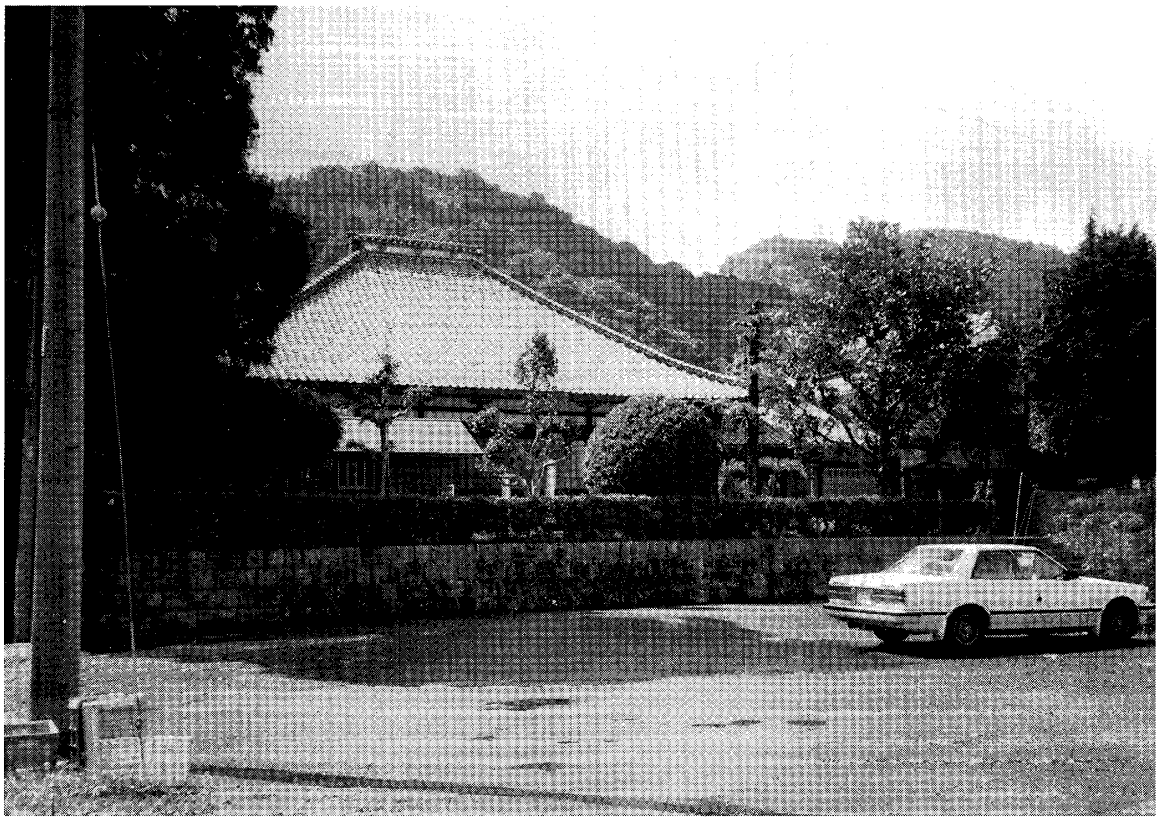
北村欽哉先生の調査によると、常圓寺扁額裏面の漢詩の文面は、次の様に記されている。

○　○○朝鮮萬里天　○○○錯歳年遷
○○華筆○東海　長使威風満潜淵　右
趙○稽[注4]

地図①　1：25,000「蒲原」
平成７年修正　○が常圓寺

「旧街道石畳」と朝鮮通信使

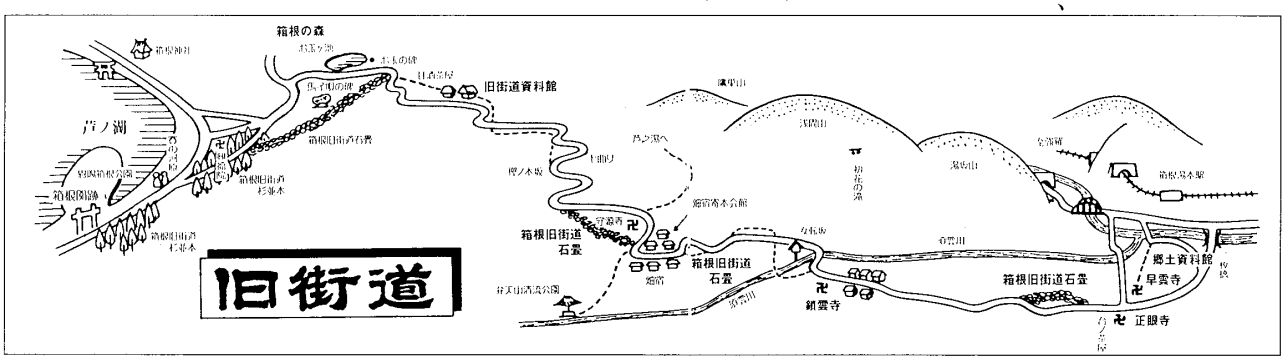
いくつもの文献に眼を通してきたが、由比以東の東海道では、文書による記録は別にすると、朝鮮通信使通行とかかわる史跡、遺跡



写真③　常圓寺本堂、額は屋内に飾られている（1999年８月写）

がなかなか見付からない。だが天下の険と唱われた箱根旧街道には、大名行列も通った石畳が、芦ノ湖畔の元箱根と須雲川渓谷沿いに点在していると記す箱根町刊行の『箱根の史跡』（平成一〇年）を入手したので、GWの一日を費して実地踏査を試み様と、準備に取りかかった。芦ノ湖畔から須雲川渓谷に沿って箱根湯本に至る区間については、明治十九（一八八六）年に正式二万分の一地形図作成を目的とした測量が行われ、「箱根驛」「畑宿」図幅が刊行されている。これらに記載される往時の「東海道」と二万五千分の一地形図「箱根」平成七年修正を対比すれば、道路の改修状況をかなり正確に読みとれる。二万五千分の一地形図「箱根」にも「箱根旧街道」の表記を施した歩道の存在が部分的に示されているが、痕跡をとどめない部分がかなりある事実が、読図対比の作業を介して明らかになった。

　こうして石畳探索の準備を進めていると、いわゆる熟年世代の男女を会員とする旅行企画組織の月刊誌『ジパング倶楽部』二〇〇一年五月号が配達された。月毎に組み替えられる特集がこの号で主題としたのは「東海道」であった。しかもおすす



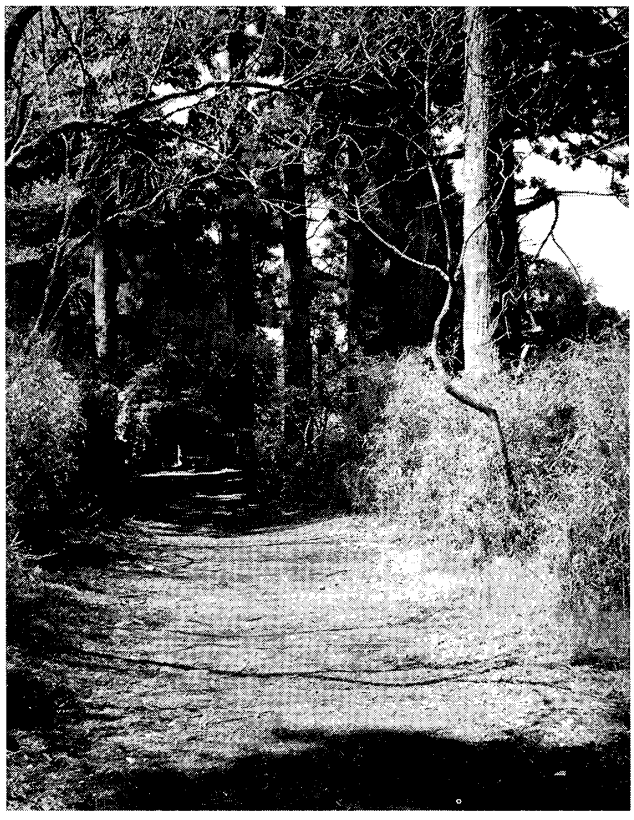
地図②　箱根「旧街道」概念図　『箱根の史跡』による

めコースの筆頭は、箱根—三島間で、〃石畳の道を歩いて峠を越え、水の都三島へ〃と題される。読み進むと、「東海道の石畳」と題する一ページを使ったコラムがあり　慶長五年（一六〇〇年）に開通した箱根旧街道は、〃赤土の急坂で、雨が降るとぬかるんで滑りやすく、また、東坂は谷筋のため日当たりが悪く、冬はなかなか解けない雪と霜柱に悩まされた〃と記した後に、〃そうした状況が変わったのは寛永元年（一六二四年）、朝鮮からの通信使の一行が東海道を江戸へ向かうことになり、外国からの要人が悪路で事故にあわぬよう、幕府は街道に簡易舗装を行ない……箱根の山中に生える細い竹を切って敷きつめるもので、その後五〇年あまりも続けられ〃たとの事実指摘がなされていた。またこの竹敷き道を石畳にかえて、メインテナンスの合理化、簡素化を計ったのが、延宝八年（一六八〇年）の時点であったとも指摘している。この様な史実を明らかにした資料の出典は記されておらず、孫引きと判断するのだが、現地探索を行うためにはとりわけ役立つ貴重な情報であった。文中に記す東坂は箱根峠を境にした小田原までの区間であるという。三島寄りの西坂にも、石畳が部分的とはいえ残っているとも記されていた。

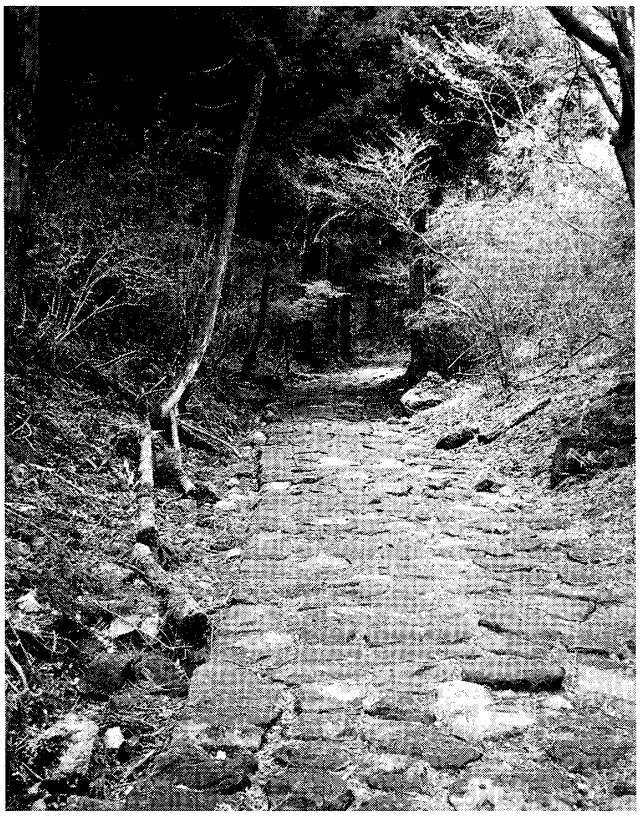
石畳は和宮降嫁の産物か？

GWの一日を使って、東坂に残る石畳を実見するために、箱根登山鉄道の箱根湯本駅で電車を乗り捨てた。天下の険を実体験するには、ここからバスを利用して旧街道では小田原、箱根宿の中間に位置した畑宿までゆき、次いで芦ノ湖畔をめざす急坂を登るべきなのだが、労が多いこの道順はさけて、箱根湯本から国道1号線を通り、宮ノ下、小涌谷、芦ノ湯を経由する正月恒例行事の大学対抗箱根駅伝コースをたどるバスを利用して、芦ノ湖北東岸の元箱根に足を向けてみた。

元箱根と箱根宿の間には、出女入鉄砲を厳しく取り調べた箱根関があり、関所施設の復元と資史料の展示がなされているが、国賓で



写真④　元箱根付近の杉並木（2001年4月写）



写真⑤　元箱根から峠に向う「旧街道石畳」（2001年4月写）

あった朝鮮通信使とは無縁の存在ゆえ、たち寄りは割愛した。この区間では、国道1号線のすぐ東側を、〃昼なお暗い杉並木〃が並行するが、元箱根から畑宿へ向かう道筋にも杉並木は残っているので、杉並木を抜けて箱根宿を訪ねる手だても省略した。

元箱根から畑宿への道は、舗装路の両側に杉並木を配していたが、五〇〇メートルほどで無舗装の歩道となり、杉並木がつきると路面は石を敷きつめた石畳の急な歩道となって須雲川渓谷との分水界となる無名の峠へと登っていく。この歩道部分には、二万五千分の一地形図が「箱根旧街道」の注記をつけている。

峠を越えて石畳の急な降り坂になると、まもなく自動車が通行する県道七三二号の舗装路を横ぎるが、その手前に石畳の由来を記す表示板が建っていた。

石だたみについて

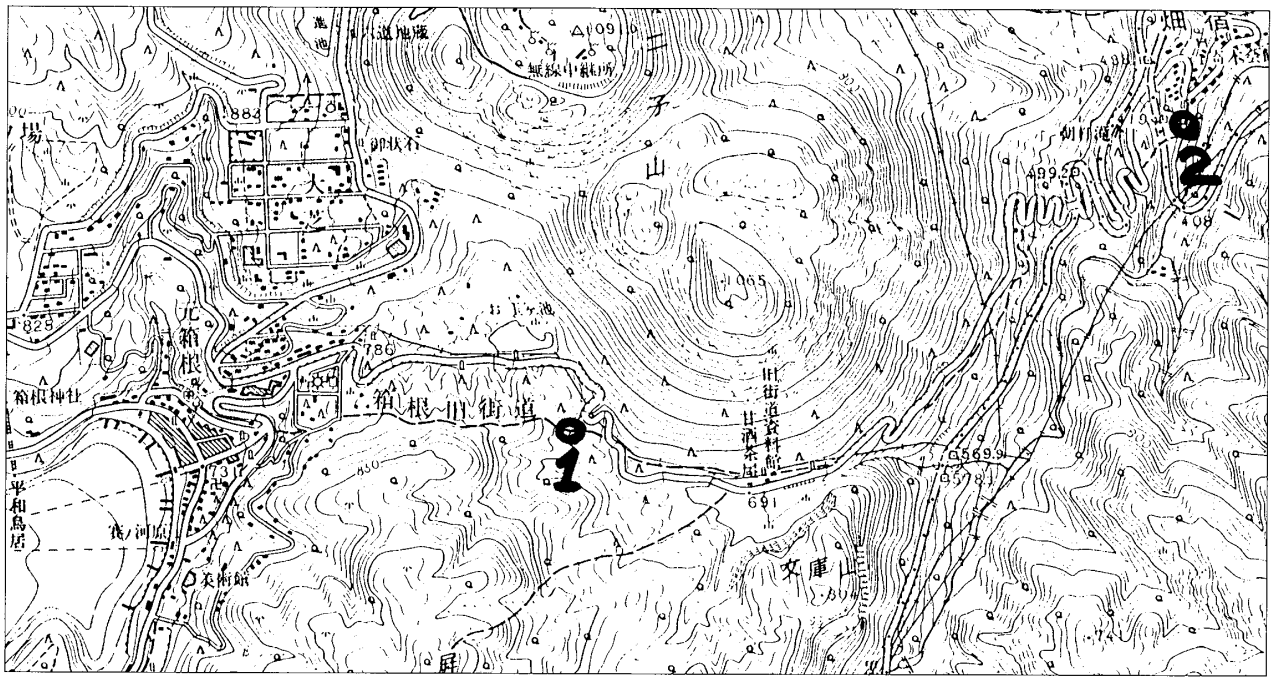
この箱根旧街道は昭和三十五年国から「史跡」として指定されました。

江戸時代の初めそれまで利用されてきた湯坂道のかわりとして利用されるようになったもので有名な「箱根八里」は、この道のことです。

この道に敷かれている石畳は延宝八年（一六八〇年）に江戸幕府が布設したものですが、其の後、文久元年（一八六三年）孝明天皇の妹和宮内親王が十四代将軍徳川家茂のもとに降嫁される際に全面的に改修されたと云われています。

神奈川県

朝鮮通信使通行にかかわるという舗装の起源についての言及は、残念ながら見当たらない。また現存する石畳が文久三年実施の大改修[注5]の結果であるとすれば、朝鮮通信使の江戸往復が取り止めになった後の存在となるわけである。



地図③　1：25,000「箱根」平成7年修正
1は敷設当時の石畳が残る地点　2は斜の排水路が残る地点

通信使通行時の石畳も残る

由来を記した表示を読んでから、石畳を踏んで歩き続けると、今度は構築状況の図解と組み合わせる解説が、これも表示板の形態でなされていた。

石畳特別保存地区
石畳の構造

この付近の石畳は、江戸時代初期、石畳施設当初の構造を、今に伝えています。

石畳は小石と土を突き固めた地面の上に、石と石とを組み合わせて並べており、さらに、石畳の横に、縦の排水路を持っています。

また並木が植っていた土手も、人工的に造られたものです。

平成二年十二月

箱根町教育委員会

前記した神奈川県による解説では、現存する石畳は、幕末の改修に伴うものであると記されるが、箱根町教育委員会による解説は、後述する資料によると、昭和五十五年八月に実施した発掘作業を伴う考古学的調査に基づくものであることから、信をおいて差し支えないだろう。残存区間は僅かでも、朝鮮通信使の行列が通行した当時の石畳が、三百余年の風雨に耐えて存在していることになろう。

車道と交差後に、甘酒茶屋へと続く歩道は石畳を欠いている。甘酒茶屋は、旧街道をハイキングの対象とする人たちへの観光施設だが、隣接の「旧街道資料館」は、五街道のひとつとして機能した当時の遺物展示を主体にして、みごたえのある存在であった。甘酒茶屋では、大和田公一・伊藤潤『箱根旧街道―石畳と杉並木』（一九九七年）を購入した。神奈川新聞社の「箱根叢書シリーズ」の一冊で、筆者はともに箱根町教育委員会の職員、綿密な実地調査と古文

地図④
1：20,000「畑宿」
「箱根驛」ともに
明治19年測量

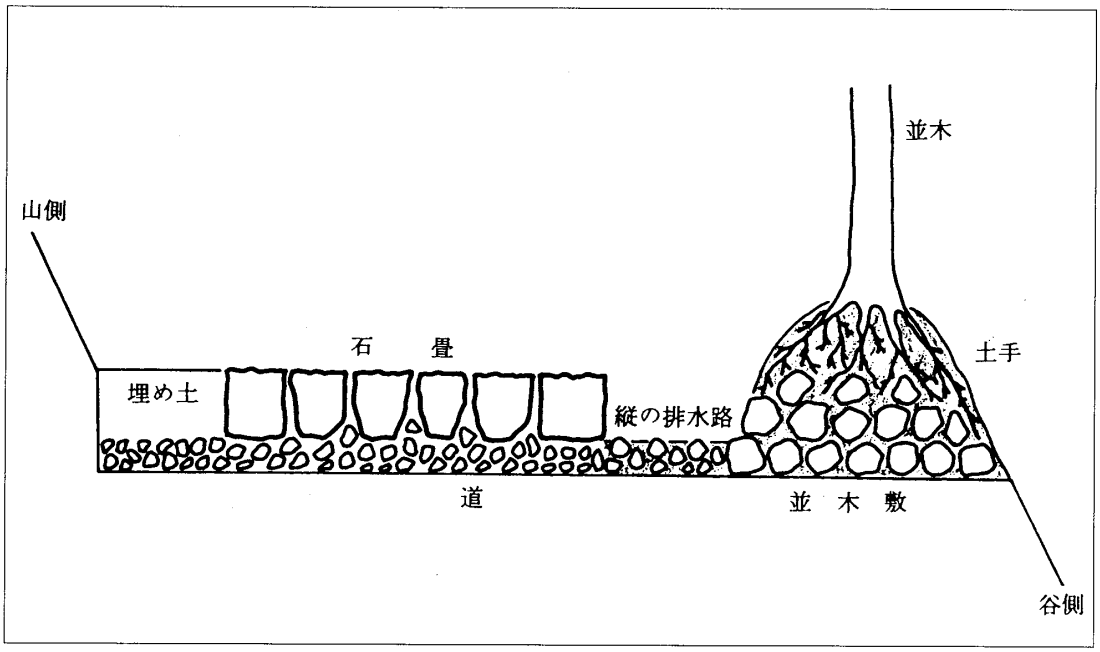
「箱根驛」図幅コピーは大庭正八氏供与

書解析をベースにし、得る処が多かった。

『ジパング倶楽部』が言及した竹敷簡易舗装の実施は、寛永五年（一六二八年）に来日した第三次朝鮮通信使の記録である『東槎録』の記述を孫引いたのだろうという判断が、『箱根旧街道―石畳と杉並木』から読みとれる。十二月九日の記事として、〃昨夜から雪が降り峠の道がひどくぬかるみ竹を切って雪をおおったので、乾いた地を踏むようであった。一夜の間にこれを整えたが、たとえ命令神速であったとはいえ、また物力が豊富なことがわかる〃と記されていた由である。[注6]

竹敷にかかわる文書は、西坂での施工を命じられた村々とのかかわりで紹介されるが、初出年次が『東槎録』記載の時点であることから、通信使行列通行を起源とするとの判断がなされているように読みとれた。

写真⑥　原形が残るといわれる石畳(2001年４月写)



旧街道石畳の構成模式図
箱根町立郷土資料館の資料による

畑宿付近に残る排水路の遺構

甘酒茶屋から先は、しばらく緩傾斜だが、旧街道の面影は全くない。一キロほど歩くと車道は「七曲り」と呼ばれるヘアピンカーブをくり返して、須雲川の谷底へ下ってゆく。歩道はコースを別にとって階段続きの急坂となる。樫ノ木坂と呼ばれたこの部分は、東坂での最大難所であったという。〝万治年間（江戸時代初期）に箱根を越えた浅井了意が書き残した『東海道名所記』という紀行文中に「樫ノ木さかをこゆればくるしくてどんぐりほどのなみだこぼるゝ」とその辛さを嘆いている〟との紹介がなされる事実に注意しよう。[注7]

いまは階段になった樫ノ木坂を降り終り、「七曲り」もつきる地点から再び石畳の歩道が始まり、畑宿の集落へ達するが、残存する区間の距離は、芦ノ湖寄りの区間に比べるとかなり短い。しかしこの区間では、石畳の維持にかかわる排水路の遺構がみられるのが、最大の利点となる。ここにも構造解説の表示板が建っていた。

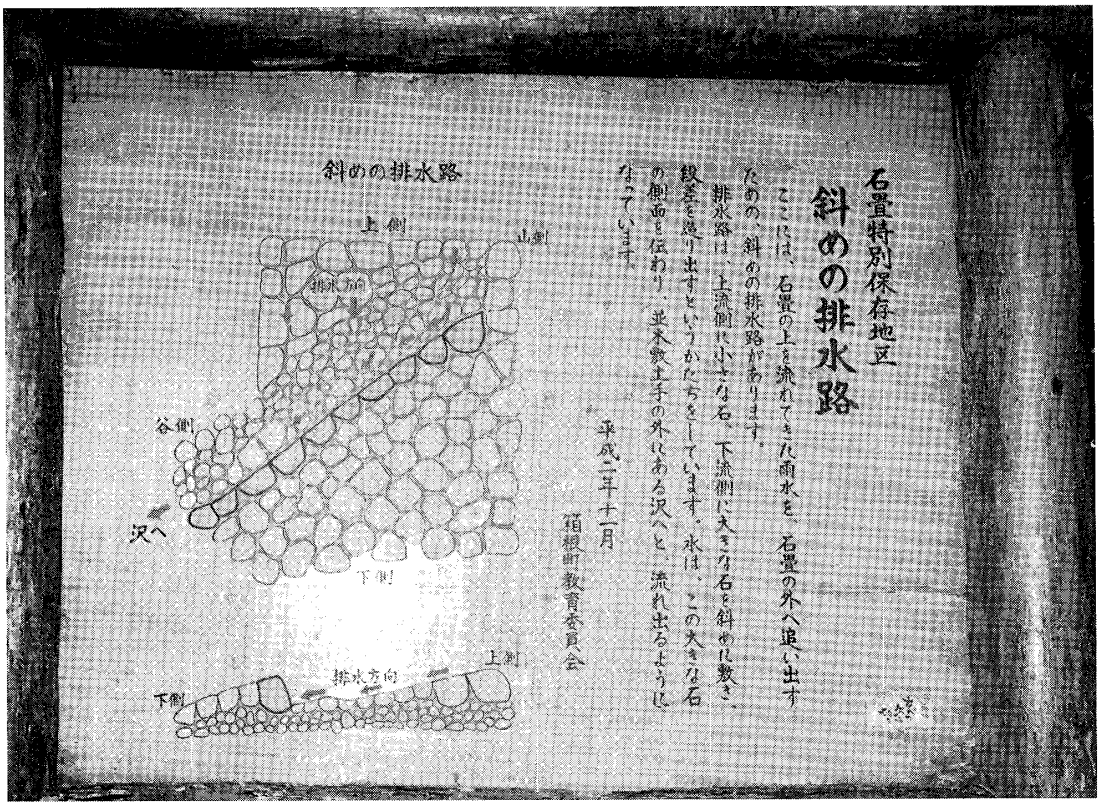
石畳特別保存地区
斜めの排水路

ここには、石畳の上を流れてきた雨水を、石畳の外へ追い出すための、斜めの排水路があります。

排水路は、上流側に小さな石、下流側に大きな石を斜めに敷き、段差を造り出すというかたちをしています。水は、この大きな石の側面を伝わり、並木敷土手の外にある沢へと、流れ出るようになっています。

平成二年十一月
箱根町教育委員会

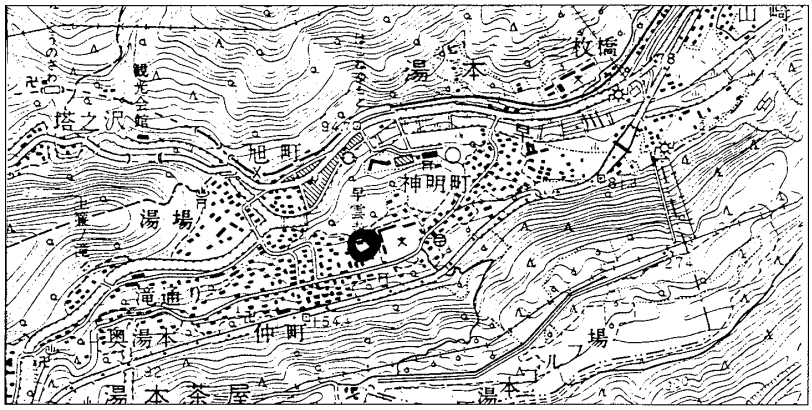
車道に沿って、うなぎの寝床となる畑宿の家並みへ入る手前に、一里塚の遺構が存在するけれど、原形をとどめてはいない様だ。『箱根の史跡』が掲載する略地図によると、石畳は、畑宿と箱根



写真⑦　斜めの排水路の説明表示（2001年４月写）

湯本の間にも、短区間ながら一か所残存すると解説されるが、その探索は省略した。

ところで西坂に残る石畳の位置については、『ジパング倶楽部』二〇〇一年五月号には、〝国道1号沿いの接待茶屋バス停から五〇〇メートルほど奥に入った茨平です。ここから狭い石畳の甲石（かぶといし）坂が竹やぶを縫うように下っています〟の記述があり、石原坂、大枯木坂、小枯木坂にも石畳が残ると指摘している。それゆえ、二万五千分の一地形図を用いてチェックすると、静岡県田方郡函南町と三島市の境界をつくる歩道の途中から三島市山中新田に至る区間の様にみたてられる。朝鮮通信使の通行当時から存在するものかどうかは不明である。いずれ機会を設けて、探索してみたいと願っている。



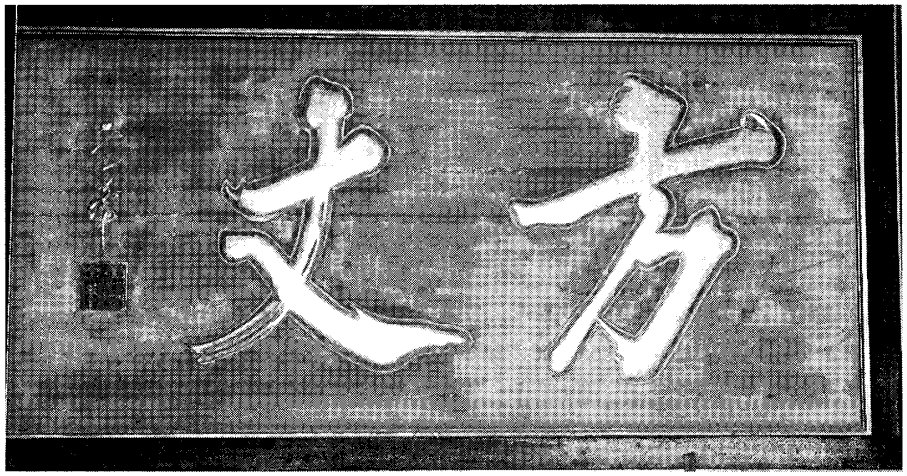
地図⑤　1：25,000「箱根」平成7年修正
○は早雲寺

写真⑧　「金湯山」の扁額をかかげる早雲寺の山門（2001年4月写）

写真⑨　早雲寺山門の扁額（2001年４月写）

早雲寺に残る二つの扁額

畑宿から箱根湯本ゆきのバスに乗り、早雲寺山門前で下車する。小田原に居をかまえ、最後は天下統一をめざす豊臣秀吉の大軍と戦い、悲劇的な最期をとげた後北條氏にゆかりの寺であろうことは、寺号から見当がつく。この寺域には、山門と本堂に、それぞれ朝鮮



写真⑩　早雲寺本堂の扁額　雪峯の署名が左にある（2001年４月写）

通信使構成員による扁額があるとの指摘がなされてきた。[注8]

山門はバスの通る県道七三二号線より少し低い位置にあり、木立に囲まれていた。扁額は「金湯山」と右横書きし、左端に朝鮮國雪峯と署名する。寛永二〇年（一六四三年）と明暦元年（一六五五年）に双方とも写字官として訪日した金義信の筆と判るけれども、どちらの年での揮毫かは検証できない。

箱根宿を早朝に出立した朝鮮通信使一行は、その日は、城下町であり宿場も兼ねた小田原に泊ったから、早雲寺に立ち寄りはしなかったと思われるので、揮毫は住職が小田原に出向いての依頼の結果だろう。

本堂の前庭には、早雲寺の由来を記す表示板があり、次の解説がなされていた。

北條早雲ヲ開基トス　北條氏五代ノ墓　狩野元信龍虎其他ノ絵畫等国宝重宝多シ　関東ニ於ケル臨済宗ノ名刹ナリ

箱根振興会

本堂の扁額は屋内の欄間に掲げられ、「方丈」と大書する。署名は雪峯とのみ記され、山門での字体とは異なっている。

早雲寺から丘を越える歩道をたどると、箱根町役場の前にでるが、庁舎と対する位置に箱根町立郷土資料館が設けられている。旧街道資料館の展示と重複する部分もあるが、箱根の歴史についての知識を得るためには、必見の存在といえよう。

資料館編集・発行の『箱根旧街道石畳と杉並木』（平成四年）を頒布するが、これは平成四年に実施した企画展の図録である。文章は「箱根叢書」に比べると平易だが、内容的には簡略化されている。しかし「箱根叢書」とは異なる地図や図面があり、双方の購入が得策だろう。五万分の一地形図をベースにした小田原―三島間のルート図が掲載され、国道一号線、県道七三二号線との位置関係がよく判る。

写真⑫　東海寺の境内　左が本堂、右が鐘楼（2000年８月写）

釣鐘だけが往時を伝える東海寺

小田原以東で朝鮮通信使一行の宿泊や中食にかかわった宿場には、古文書としての記録を残す事例がいくつかあり、冊子を作る地方自治体もあるけれど、具体的な事物を伴う史跡や遺跡を見つけることはできなかった。三使が立ち寄った筈の本陣についても、往時の建物が残る例は皆無で、本陣跡の標識が建っていれば上出来という類である。

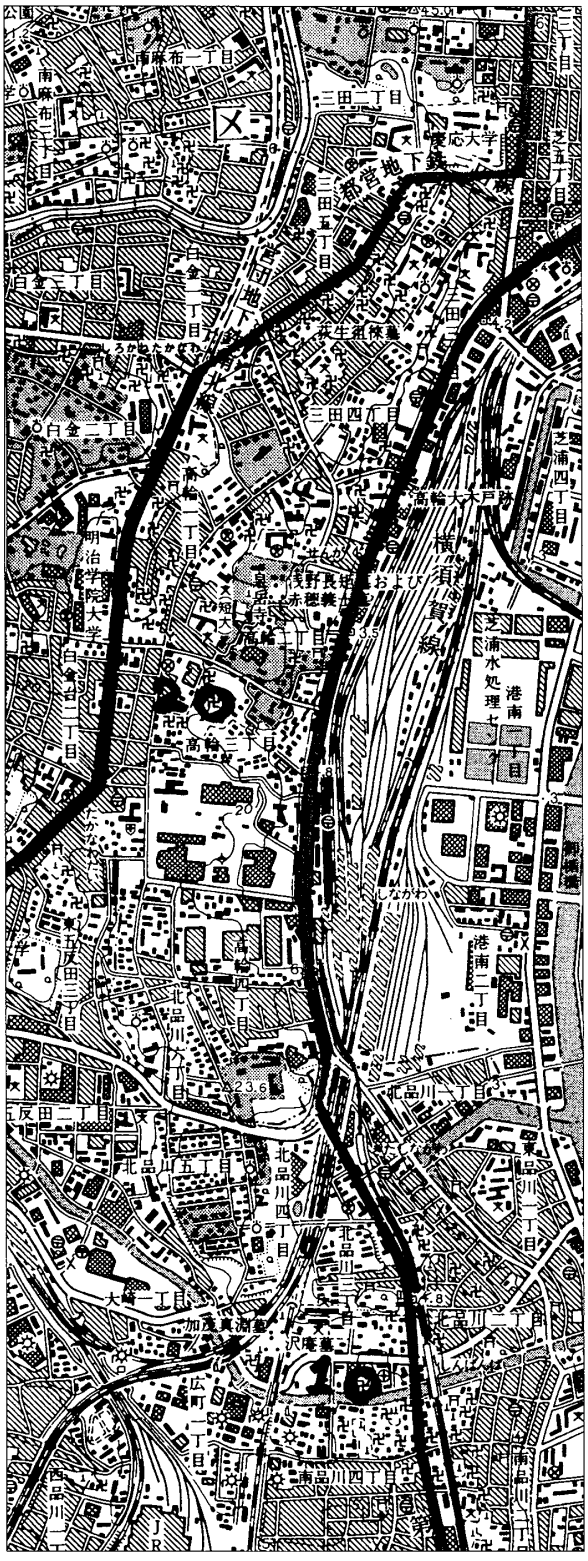
小田原を後に、藤沢、神奈川と泊まりを重ねた後、江戸入りを果たす前に、身支度を整えるため立ち寄ったのは、東海道の起点江戸日本橋の次に位置して最初の宿場となる品川であった。

品川宿で拠点となったのは、東海寺であるという。品川という地名は、ＪＲ品川駅の存在を連想させるが、品川駅の位置は港区高輪で、品川区には属さない。明治五年（一八七二年）に、日本最初の公共用鉄道が仮開業したおり、高輪に設けたにもかかわらず停車場に品川の名称を付したのが、誤解を生む発端になった。

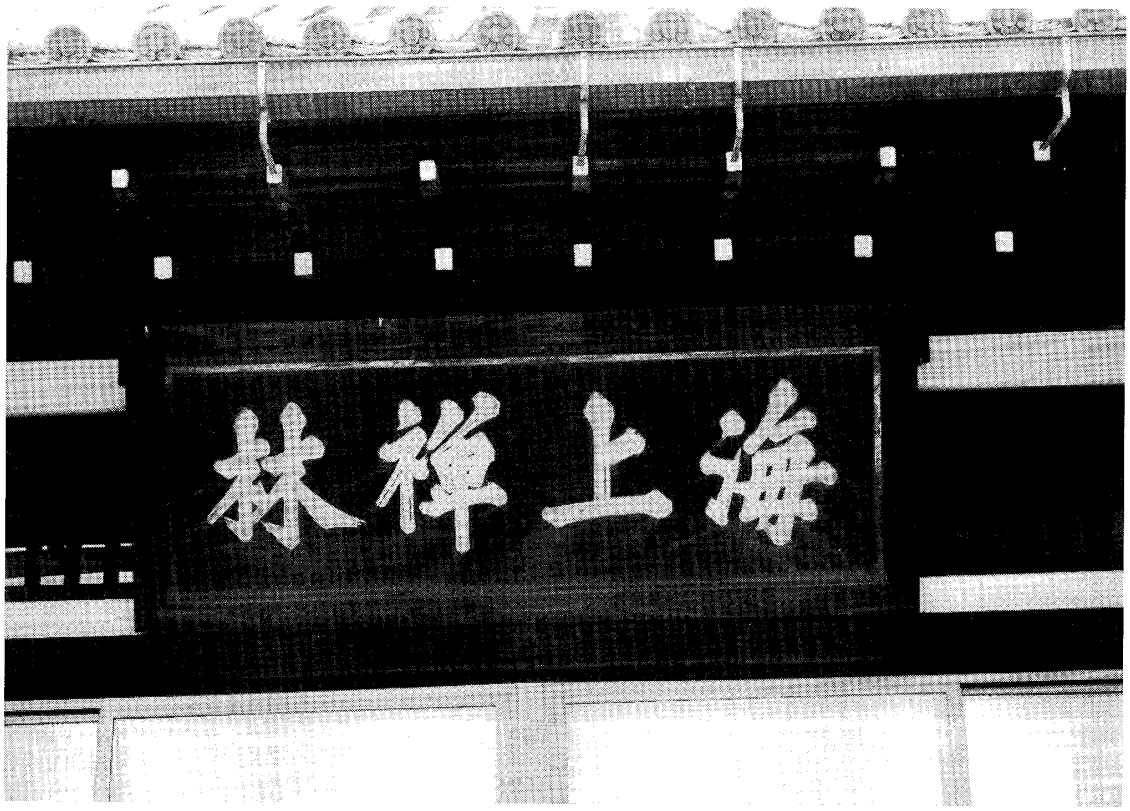
東海寺へは、京浜急行電鉄を利用して新馬場駅で降り、第一京浜国道（国道十五号）から西へ派出する山手通りを歩いて五分くらいでゆきつける。江戸時代には寺域四万七千余坪の規模を持ち、十七の塔頭を擁したという巨刹も、明治以降は凋落が甚しく、山手通りからさして広いとはいえぬ参道をたどる存在と化してしまった。山手通りに面して建つ「東海禅寺」と記す石柱がなければ、見落としかねない。

本堂、庫裡の規模も小さく、寺歴を記す表示板も見あたらない。本堂脇の鐘楼を前にして、釣鐘は幕府御用鋳物師椎名伊予守良寛が、元禄五年（一六九二年）鋳造と記す標札があるので、これだけが朝鮮通信使の大行列を見定めた唯一の存在であろう。

東海寺の関係者は、江戸時代に朝鮮通信使と大きくかかわったという史実になんの関心もなく、ゆかりの寺と知って訪ねたら迷惑がって追いはらわれたと憤慨する談話を、朝鮮通信使の史跡を訪ねるツアーで、参加者の一人から聞きとった。[注9]



地図⑥　1：25,000「東京西南部」
平成５年修正　１は東海寺
２は東禅寺



写真⑫　東禅寺本堂の扁額（2000年８月写）

写真⑬　東禅寺の本堂と庫裡　イギリス公使館当時の面影を伝えるという。（2000年８月写）

写真⑭　東禅寺総門　扁額は「東禅寺」と記される
（2000年８月写）

東禅寺に残る雪峰揮毫の扁額

美々しく着飾って品川宿を出立した行列は、高輪の大木戸を抜けると、最終目的地である江戸の街並みにたどり着く。その直前で街道左手奥に、日英和親条約の結果として、江戸市街至近の位置に設けられた在日イギリス公使館という史実を背おう東禅寺が今もかなりの寺域を構えている。東禅寺には朝鮮通信使が立ち寄ったことはない筈だが、イギリス公使館として用いられた当時から存在する本堂には、「海上禅林」と大書する扁額が掲げられ、早くから朝鮮通信使にゆかりの事物と知られてきた。扁額は、揮毫者の署名を欠いているが、『江戸名所図会』には、〝総門は海に臨む。この門の額、海上禅林の四文字は、朝鮮国雪峰の筆なり。すこぶる世に称せり〟との記述があるという。[注10]現在は総門に「海上禅林」の額はなく、「東禅寺」と寺号を示す額が掲出され、かたわらには「日本最初のイギリス公使宿館跡」と記す石柱が眼に入る。

東禅寺に朝鮮通信使来日にかかわる書が残るのは、東海寺と同宗のよしみで、伝手を頼る揮毫依頼の結果だろう。

ＪＲ品川駅の西口から歩道橋で第一京浜国道を渡り、北へ歩いてプリンスホテルの敷地をではずれた処から斜行する袋小路の突きあたりに、東禅寺の総門が建っている。

朝鮮通信使とは無縁だが、文久元年五月二十八日（一八六一年七月五日）に発生した浪士の集団による公使館襲撃は、公使オールコック暗殺を果たしえず、幕府が派遣していた警護の武士たちの活躍もあって、六人の死者を残しての敗退に終わるのだが、惨劇の詳報は、特派画家ワーグマンによるスケッチを付して『絵入り倫敦新聞』The Illustrated London News の一八六一年九月二十八日号を飾ったのである。[注11]東禅寺本堂の欄間に掲げられる「海上禅林」の扁額は、このときはどこに所在していたのだろうか。

（注）

（1）由比町企画観光課「薩埵峠を歩いて見よう！」参照。

（2）北村欽哉『馬上才』第九号（一九九六年）

（3）静岡県立清水南高等学校郷土研究部『東遊』第十五号―特集：清水市内寺院の山号と寺号（一九九三年度）八十四ページ。

（4）漢詩の意味は、〝万里も離れた天の下にある朝鮮からやって来たが、随分長い時間が経ってしまったように思われる。朝鮮から見ると東海の地にある日本にやって来て、私の筆で朝鮮通信使の威風を日本のすみずみまで満たしたいと思う〟と表現されるのだろうと、北村欽哉先生は記している。

（5）神奈川県が建立したこの標示板の説明は明らかに史実と相違する。「降嫁」した和宮の江戸への旅は、中山道経由で実施され、下諏訪宿の本陣に充てられた建物には和宮が宿泊したと称する座敷が保存されている。東坂での石畳改修は、第十四代将軍家茂の上洛に備えて、文久二年に実施された由で、その事実を示す相模国足柄下郡須雲川村の提出した文書が、箱根町立郷土資料館に寄託されている由である。

（6）大和田公一・伊藤潤『箱根旧街道―石畳と杉並木』（一九九七年）かなしん出版　一八・九ページ。

（7）注6の七八ページ。

（8）「神奈川のなかの朝鮮」編集委員会『神奈川のなかの朝鮮』（一九九八年）明石書店　三五ページ。

（9）このツアーについては、中川浩一「豊臣秀吉朝鮮侵略の史跡を訪ねて」（三）流通経済大学論集三六の一（二〇〇一年）で言及した。

（10）尾河直太郎『新版史跡でつづる東京の歴史』中　一声社　九二ページ

（11）原画のコピーと記事の邦訳は、金井圓編訳『描かれた幕末明治―イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信一八五三―一九〇三』（一九七三年）雄松堂書店　七〇―七二ページに収められている。